



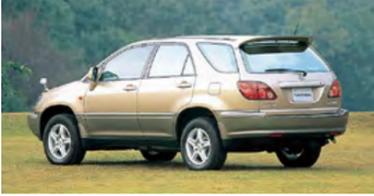
一般社団法人 日本流行色協会 (JAFCA) 主催 <1998~2025>  
モビリティのカラーデザインコンテスト

# Auto Color Awards 歴代グランプリ

1998年度よりはじまった「オートカラーアワード」。歴代のグランプリをご紹介します。  
色名の (ext) はエクステリアカラー、(int) はインテリアカラー。第8回より色名にインテリアカラーも併記。  
なお、2020年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響で開催されていません。

第1回 (1998年度)

「ハリアー」(トヨタ自動車) /  
スパークリングゴールドメタリック (ext)



上質でラグジュアリーな「ニューコンセプトSUV (スポーツ・ユーティリティ・ピークル)」をイメージしたデザインにベストマッチしたボディーカラーを開発した。

第2回 (1999年度)

「ヴィッツ」(トヨタ自動車) /  
パールローズメタリックオパール (ext)



自動車という機械工業製品において、これまでにないソフトでフェミニンなテイストを開花させた。

第3回 (2000年度)

「マツダロードスター」(マツダ) /  
クリスタルブルーメタリック (ext)



斬新な色を投入するのが難しいといわれていた日本のスポーツカー市場に、若々しく活動的なブルーを投入し高い支持を得た。

第4回 (2001年度)

「ルポ」(フォルクスワーゲングループジャパン) /  
ファンタシアグリーン (ext)



インパクトのあるソリッドのグリーンは、新技術がカラーデザインをリードする時代から、メッセージ性のあるカラーの時代へという変革を象徴した。

第5回 (2002年度)

「マーチ」(日産自動車) /  
パブリカオレンジ × シナモン (ext) とコミュニケーションカラー



パブリカオレンジを含む5色の展開によって、ユーザーに色を選ぶ楽しさを提供し、色によって顧客満足度を高めた。

第6回 (2003年度)

「Newビートル」(フォルクスワーゲングループジャパン) /  
ハーベストムーンベージュ & ブラックルーフ (ext)



なごみ感、洗練さのあるベージュ。Newビートルの親しみやすいキャラクターにベストマッチした優雅なライフスタイルを連想させる世界観を表現した。

第7回 (2004年度)

「クラウンマジェスタ」(トヨタ自動車) /  
プレミアムシルバーパール (ext)



見慣れた色といえるシルバーを、奥行き感とシルキーな光沢感でさらに洗練させた。高級であることに迷いなく向き合った、ビューなカラーデザイン。

第8回 (2005年度)

「マーチ」(日産自動車) /  
チャイナブルー (ext) アイスブルー (int)



旬を感じさせるターコイズブルー。内外装ともにブルーという打ち出しは、メッセージが明確だった。

第9回 (2006年度)

「ティアナ」(日産自動車) /  
ミスティグリーン (ext) ワイマラナー (int)



落ち着いた色のあるグリーンのエクステリアとベージュ(ワイマラナー)のインテリアは、安心感、信頼感のある色。

第10回 (2007年度)

「マーチ」(日産自動車) /  
サクラ (ext) カカオ (int)



甘ったるいムードになりがちなピンクをナチュラルに表現。ロングライフデザインで、カラーにより時代性を打ち出していくマーチの戦略も評価された。

第11回 (2008年度)

「FCXクラリティ」(HONDA) /  
スターゲートメタリック (ext) ウォームグレー (int)



「エコカー」である燃料電池車の色として、宝石をイメージした透明感ある美しい赤を設定。新しい「エコ」カラーの方向性を示唆するものである。

第12回 (2009年度)

「フェアレディZロードスター」(日産自動車) /  
プレミアムティンブールパール (ext) ボルドー (int)



初代フェアレディZの色を今にモダン化したマルーンは、長く愛されている色。長く続くような色気をもっている。

第13回 (2010年度)

「CR-Z」(HONDA) /  
ホライゾンターコイズパール (ext) ブラック×シルバー (int)



落ち着いた色のあるプレミアム感がありながら同時にスポーティさもあわせつつ、時代に合ったブルーである。

第14回 (2011年度)

「スカイラインクロスオーバー」(日産自動車) /  
セラミックブルー (M) (#FAH) (ext) ブラウン (P) (int)



「青磁」をテーマにしためくもりのあるブルーが新鮮。スポーティイメージのエクステリアデザインがカラーによってまったく違って見えた点も評価される。

第15回 (2012年度)

「XV」(富士重工業) /  
デザートカーキ (ext) ブラック (int)



彩度を抑えた渋いソリッドのカーキに、部分的に黒を効かせた美しいコーディネートが高く評価された。

第16回 (2013年度)

「LEXUS IS 300h」(トヨタ自動車) /  
ソニックチタニウム (ext) トパーズブラウン (int)



ハイライトからシェードまで明暗のレンジが広く、陰影感が強いソニックチタニウムは、どんな光の状況でも美しく見え、ISの造形にもあっている。

第17回 (2014年度)

「ハスラー」(スズキ) /  
パッションオレンジ × ホワイトルーフなど3つのextカラー



“楽しい”をストレートに表現した色。カラーデザイナーが製作に関わる人たちの巻き込んで新しいカラーに果敢に挑戦し、実現したことも高評価を得た。

第18回 (2015年度)

「アルトラバン」(スズキ) /  
フレンチミント3トーンなど3つのextカラー



生活者のライフスタイルが見えるカラーデザイン。これまでに採用されにくかった色域に挑戦し、カラーデザイナーの思いが細部にまでいかされている。

第19回 (2016年度)

「マツダ ロードスターRF」(マツダ) /  
マシングレープレミアムメタリック (ext) オーパーン(int)



マシンの鉄をイメージさせるグレーを、グラマラスなカラーとして作り上げた。CMFと形状が一体となった非常に調和した美しさを持っている。

第20回 (2017年度)

「MT-10/MT09/MT07」(ヤマハ発動機) /  
ブルーイッシュグレーソリッド4



バイクではホイール部分に明るい色を使うことがタブーとされていた中で、鮮やかなイエローを採用、タンクのグレーとあわせ新しいカラーに挑戦していた。

第21回 (2018年度)

「N-VAN (エヌバン)」(HONDA) /  
ガーデングリーン・メタリック (ext) ブラック (int)



性別や年齢に関係なくマッチする、温かみを感じさせるグリーン。シェアの時代に相応しい、新しい「ニュートラルカラー」といえる。



第22回 (2019年度)

「MAZDA3 Fastback」 & 「MAZDAX-30」  
(マツダ) / ポリメタルグレーメタリック (ext)



樹脂のようなぬるっとした質感表現と、青みの入ったような微妙なニュアンスのあるグレーが高く評価された。

第23回 (2021年度)

「LEXUS LS500h/LS500」(トヨタ自動車) / 銀影ラスター(ext)  
& 「アリア」(日産自動車) / 焔アカツキ(サンライズカッパー(M)) / ミッドナイトブラック(P) (ext)  
\*2つのカラーが同時受賞



LEXUS LS500h/LS500 / 豪華さがあがりながら洗練され、積み上げられた意匠技術の結実のような高いクオリティである。

アリア / グローバルな視点による“輝”をテーマにした、先進的なCMF。

第24回 (2022年度)

「ハイゼットトラック」(ダイハツ) / アイスグリーン、ファイアークオーツレッドメタリックなど3つのextカラー



“はたらく”クルマに見過ごされていた、快適性や愛着に着目し、ユーザーの声を聞きながら、軽トラに新しいカラーを登場させた。

第25回 (2023年度)

「N-BOX(エヌボックス)」(HONDA) / オータムイエロー・パール (ext) グレージュメグレー (int)



カスタマーの行動をよく観察し、機能性と楽しさをリズムカルに表現、ほっこり温かくなるような、ちょうどよいイエローを実現した。

第26回 (2024年度)

「MAZDA CX-80」(マツダ) / メルティングカッパーメタリック (ext) ブラック (int)



カッパーの新しい表現を追求し、見事に実現した。細部までデザインにこだわり、それが一つの物として完成して、圧倒的な存在感を生み出している。

第27回 (2025年度)

「YZF-R3/YZF-R25」(ヤマハ発動機) / マットパールホワイト



「一目ぼれの方程式」というテーマを的確に体現し、デザイナーが企画段階から深く関わったというプロセスが完成度の高いデザインを生み出している。

